

Feast of the Stigmata 2026

INDEX

2026年の聖痕の祝日.....	2
総本部の予定.....	2
総長小さき兄弟会のすべての志願者、 修練者、有期誓願者に宛てた総長の手紙.....	4
総長、マダガスカルおよびモーリシャスの 「無原罪の聖母」管区訪問.....	5
ブラジル・アマゾンの「聖ベネディクト」分管区、 新執行部選出.....	6
フランスにおける800周年：聖フランシスコのマンガ.....	6
メジュゴリエにて、 フランシスカンジュビリーの締めくくりのミサ.....	8
フランシスカン第一会の養成総事務局会合.....	9
また始めよう (Inicipe iterum).....	10
南アフリカ「平和の元后マリア」管区における JPIC委員会の会合.....	11
ブラジル・サザンコーン協議会、 養成者コース第2期が終了.....	12
トルコの大学生を対象とした OIKOS Mediterraneoのサマーキャンプ.....	14
ルブンバシにおけるフランシスカンの喜び.....	15
Life in the Otder.....	16
OIKOS MEDITERRANEOがエジプトで 多文化対話・諸宗教対話を推進.....	17
カトリックのデジタル宣教師たちによる アジア初の総会.....	18
Franciscan Bookmark.....	18
兄弟Gerardo Antonio Vargas Cruz (OFM)、プエルトリコ ファハルド・ウマカオ教区補佐司教に任命.....	18



2026年の聖痕の祝日

何も自分のために取っておくことはなかった



WWW.OFM.ORG

ラ・ヴェルナでは、例年通り9月16日と17日に、フランシスカンの共同体、若き巡礼者たち、そして数百名の信者たちが、聖フランシスコの聖痕の祭日を祝った。聖フランシスコの帰天800周年を記念するフランシスコ年に行なわれた祝祭は、参加者たちにとって、とても感動的で、実に豊かな時間となった。

小さき兄弟会の総長の兄弟Massimo Fusarelliは、9月16日の徹夜祭のミサで、トスカーナの聖痕の聖フランシスコ管区の兄弟たち主催の夜間巡礼に参加していた多くの若者たちに語りかけた。巡礼団は、キウージ・デッラ・ヴェルナの主教区を出発し、暗闇のなかを祈り歌いながら歩き、巡礼所に到着してミサに参加していた。兄弟Massimoは、若者

たちに向けて、何かをあきらめて荷物を軽くする必要のある旅のイメージを強調した。そして、行き先も知らずに旅立ったアブラハムのように、また、もっていたものをだんだんと手放してラ・ヴェルナにたどり着いたフランシスコのように、神の御手に身を委ねるよう招いた。「皆さんの重荷となっているものを手放すことを恐れてはいけません。キリストを見つめることを恐れてはなりません。キリストに身を委ねることを恐れなくてください。キリストに身を委ねる人は、自分のいのちを失うことなく、新しいいのちを受けるのです」。

総長は、残念なことにしばしば愛が所有と混同されがちなこの時代に、主の十字架以外には「何も自分のために取っておくことはなかった」アシジの貧

総本部の予定



・兄弟 Jimmy Zammit (総理事)、兄弟 Darko Tepert (養成・学問総事務局長)、兄弟 Francisco Gomez Vargas (福音宣教総事務局長) は、9月20日から23日まで、フランシスカン・ミッション総事務局の理事会に参加予定。

・総長の兄弟Massimo Fusarelliは、9月21日から24日まで、副総長の兄弟Ignacio Cejaとともに、モロッコにある本会の聖初期殉教者分管区を訪問予定。9月25日から27日まで、総理事の兄弟Cesare Vaianiとともに、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ管区を訪問予定。9月28日から30日までは、スウェーデンのヴェステロースにおいて、フランシスカンの拠点で活動するアシジの聖フランシスコ管区（ポーランド）の兄弟たちを訪問し、総理事の兄弟Konrad Cholewaとともに、生涯養成の会合に参加する予定。10月2日から4日まで、アシジにおいて、一連の行事に参加する予定。2日は第一会総長協議会のため、3日はフランシカン会家族協議会のためである。3日に、サンタ・マリア・デリ・アンジェリで、総本部の兄弟数名とともに聖フランシスコの帰天を祝い、4日には、サクロ・コンヴェントで聖フランシスコの祭日のミサに参加する。10月5日には、フランシスカ

ン聖書研究所の新年度のミサおよび始業式のため、エルサレムを訪問予定。

・兄弟Konradは、9月27日から30日まで、イタリアのサン・レーモで、このリグリア州の町にポーランドの諸天使の聖マリア管区の兄弟たちが設けた拠点の設立30周年を祝う予定。

・兄弟Ignacioは、9月29日から10月4日まで、総理事の兄弟Siphelele Gwanisheniとともにトーゴを訪問し、受肉のみことば管区の兄弟たちと会い、聖フランシスコの帰天800周年とアフリカの当地域への小さき兄弟会到着70周年を祝う予定。

・総理事の兄弟Albert Schmuckiは、9月29日から30日まで、コレッティン・クララ会の教会法上の視察の準備のため、アシジを訪問予定。

・兄弟Cesareは、9月30日から10月3日まで、エルサレムの聖救世主教会で、聖フランシスコの祭日に備える三日間の祈りの説教をする予定。

・総理事会は、10月5日から10日まで、ヨルダンのネボ山において、黙想会を行なう予定。



者の勇気ある選択をあらためて強調したいと望んだ。これこそが、9月17日の説教における兄弟Massimoの中心的なメッセージである。また、総長は、フランシスコが聖痕を決して誇らなかったこと、そしてすべての弟子たちに、一つの規則、というよりもむしろ「唯一の規則」を遺したことを強調した。その規則、すなわち「何一つ自分のものをもたずに」生きることは、財産に関する規範ではなく、一つの生活様式なのである。

さらに総長は、フランシスコがこの自由にならずに到達したと指摘した。父親の財産を返し、修道会の統治を手放し、共同体が自分のものではないことを認めたのである。ラ・ヴェルナで受けた聖痕でさえ、フランシスコにとっては、自分のために取っておきたいもの、誇りにしたいものではなかった。フランシスコは、レプラ患者たち、司祭たち、兄弟たち、そして教会について触れている『遺言』のなかで、聖痕について一言も述べていない。「何も自分のために取っておくことのない人は、恵みさえも手元に留めておきません。自分の傷さえも留めておかないのです」と兄弟Massimoは言った。

ここから、ラ・ヴェルナと帰天の間の結びつきも生まれる。フランシスコは山を下り、ポルチュンクラへと歩みを続け、そこで1226年10月3日、自分に残された最後のもの、すなわち自らの肉体を委ねることになる。総長は、「肉に刻まれたしるしと、土に帰る肉体は、同じ動きをしています」と説明し、召し出しとは、安心や重要性、あるいは承認を与えてくれるものを自分のもとに留めて

おくことではなく、それを返還することであると。言った。「返す人は、それを失いません。むしろ受けるのです」。

最後に、聖クララについても触れた。クララは所有しないことを求め、貧しいキリストに従う自由を得るために、あらゆるものから自由になることを選んだのである。そして、参加者たちは、「両手を開く」よう呼びかけられた。「兄弟姉妹の皆さん、今日、聖痕を祝うというのは、この恵みを求めることを意味します。それは、両手を開いて手放すことです。財産や功績、傷を自分のために留めておかenことです。すべてを感謝のうちに受け入れることです。すべてを愛とともに返還することです。ご自身のすべてを私たちにささげてくださった方が、私たちのすべてをご自分のもとに受け入れてくださるようになるためです」と述べて、総長は説教を終えた。

こうした勧めは、兄弟たちや信者たちが巡礼所内の聖痕の礼拝堂で伝統的な行列を行なう際に唱える、聖フランシスコの祈りにも込められている。

[9月16日の説教を読む](#)

[9月17日の説教を読む](#)

[聖フランシスコの祈りをダウンロード](#)

[Flickrですべての写真をすべて見る](#)





Government of the Order

総長小さき兄弟会のすべての志願者、
修練者、有期誓願者に宛てた総長の手紙
聖フランシスコの帰天800周年にあたって



ラ・ヴェルナ、2026年9月17日

親愛なる兄弟へ、

主があなたに平和を与えてくださいますように。

私は、800年以上前にここラ・ヴェルナで、主がフランシスコの体にご自分の受難のしるしを刻まれた日に、この手紙を書いています。これらの傷から、私たちが数週間後に祝うことになっている帰天にいたるまで、ただ一つの道が貫いています。それは、自らの人生における最後の言葉をキリストに委ねた人の歩みです。

私は、皆さんの顔や心に抱いている問いを思い浮かべながら、この手紙が志願者、修練者、有期誓願者の皆さん一人ひとりに届くことを願っています。皆さんは、この本会の若い顔です。

主は、皆さんを通して、フランシスコに明かされた様式で福音を生きようとする人々を、いまもなお呼び続けておられます。

[手紙の全文を読む](#)

LETTER FROM THE MINISTER GENERAL

*to all Postulants, Novices and Temporary
Professed of the Order of Friars Minor*

on the occasion of the VIII Centenary
of the Transitus of St. Francis

1226 — 2026
Franciscus
Eight Hundredth Anniversary of the Death of St. Francis

総長、マダガスカルおよびモーリシャスの 「無原罪の聖母」管区訪問

2026年8月27～9月2日



WWW.OFM.ORG

8月27日から9月2日にかけて、総長の兄弟 Massimo Fusarelli, OFM は、総顧問 兄弟 Siphelele Paulus Gwanisheni, OFM を伴い、マダガスカルとモーリシャス島からなる「聖母マリアの無原罪の御宿り」修道会を訪問した。今回の訪問では、省評議会、各プロジェクトの責任者、養成の家（養成者と志願者が一堂に会した場）、および複数の司牧現場との会合が行われた。また、在世会や、2つのクララ会修道院、そして修道会の宣教活動に積極的に協力しているフランシスカン修道女（特にマリアの宣教者フランシスコ修道会（FMM）およびパラガーノの無原罪のフランシスコ修道女会）との談話ももたれた。

この島におけるフランシスカンの歴史は、1959年に旧リヨン修道会から最初の兄弟たちが到着したことに始まる。彼らは宣教司牧に従事し、マダガスカル人初の召命が与えられたのはそれから約20年後のことであった。現在、同修道会には盛誓願兄弟51名、初誓願兄弟43名、試修期間を開始する志願者（ノビス）7名、少なくとも14名の志願者（ポストラント）、そして多数の志願希望者（アスピラント）が所属している。9月7日には、9名の

兄弟が盛誓願を、2名が初誓願を立てる予定である。

兄弟たちとの会合の中で総長は、司祭的務めへのみ偏重する傾向を乗り越え、マダガスカルの状況におけるフランシスカンとしてのアイデンティティをより深めるよう呼びかけた。また、最貧困層に向けた養成と宣教的福音化の強化を重点課題として挙げ、特に若い兄弟たちの召命を支えるため、祈りと分かち合いに裏打ちされた質の高い兄弟的共同体生活の重要性を強調した。さらに、兄弟自らが日々の生活に必要な資財を生み出すプロジェクトを通じ、同修道会がすでに歩みを進めている経済的自立への取り組みについても協議が行われた。

信仰と共同体生活の簡素さと喜びに触れた訪問団は感銘を受け、アフリカとアジアの間に位置するこの広大な島における若い管区の未来と、豊かなフランシスカンの臨在に希望を見出した。この地は文化の交差点であり、政治的不安や深刻な社会的不正義、広範に及ぶ貧困に見舞われながらも、特に若者たちを中心に開発とより良い未来への強い願いが満ちている場所である。



ブラジル・アマゾンの「聖ベネディクト」分管区、 新執行部選出

2026年9月4日、ブラジル



WWW.OFM.ORG



ブラジルの「アマゾンの聖ベネディクト」分管区において、2026年9月4日に新執行部が就任し、今後3年間の任期を務めることとなった。同分管区の霊的黙想を終えた兄弟たちは、総長代理の兄弟César Kulkamp を迎え、同氏によって以下のメンバーで構成される新執行部の任命勅令が読み上げられた。

ンバーで構成される新執行部の任命勅令が読み上げられた。

・分管区長 (Custos) : 兄弟Wanderley Gomes De Figueiredo, OFM (「七つの喜びの聖母」自治管区分管区・ブラジル)

・副分管区長 (Vicar) : 兄弟Valcy de Assunção Pinto, OFM

・理事 (Councillors) : 兄弟Gregory (Gregory Robert) Joeright, OFM、兄弟João Messias Da Silva Sousa, OFM

集会はこの任命を平静をもって受け止め、非常に重要な宣教地域に位置する同分管区が、総会の支援のもとで歩みを進める今後の刷新の道のりを見据えた。

新管区長ならびに新理事会の今後の活躍を祈念したい。



Franciscan Centenaries

フランスにおける800周年：聖フランシスコのマンガ！

アンジの貧者を題材としたフランス語初のマンガ



WWW.OFM.ORG



フランシスコ年に、異例のプロジェクトが実現した。聖フランシスコの生涯を描いたフランス語初のマンガが、つい先日刊行されたのである。これは、フランスとベルギーの小さき兄弟会管区とキリスト教出版社Emmanuelとの協力の成果である。このプロジェクトがどのようにして生まれたのか、その経緯を振り返ってみよう。

「ローマから、フランシスカン家族国際協議会の作業文書が届きました。そこでは、800周年の記念の影響が、教会以外の社会的・文化的分野にも及ぶように、想像力と独創性を働かせることが呼びかけられていました」と、当時の広報部長で、現在は管区長を務める兄弟Frédéric-Marie Le Méhautéは説

明する。呼びかけは、日本の大衆文化を間近で知る機会があったこの兄弟の長年の願いと交差した。それは、聖フランシスコを題材としたフランス語初のマンガを実現することであった。

「マンガという形式を用いることで、800年前に



亡くなった聖人を、きわめて現代的な文化的表現と結びつけることが可能になります。それは、現代世界におけるフランシスコの今日性を再解釈し、翻訳し、再発見する旅に出ることを意味します」。したがって、マンガという形式の選択は、明確な伝達意図に基づくものだった。このプロジェクトは、若い世代の間で広く普及している視覚的な言語を用いて、アシジのフランシスコの生涯、人物像、メッセージに、親しみやすく新しいアプローチを提案することを目指していた。この挑戦は、Éditions Emmanuel社と、伝記グラフィックノベル『カルロ・アクティス：天国への高速道路 (Carlo Acutis: En route vers le Ciel)』のイラストレーターÉmilie Droulersに委ねられた。

若き女性マンガ家は、「マンガのリズムはゆったりとしています。動きを細かく分解し、登場人物が感じているものを示す時間が必要となるからこそ、その人物が私たちにとって身近に感じられ、その人生に没入することができるようになるのです」と語る。そして、聖フランシスコの激しい人生を考えれば、これほどこの表現形式にふさわしい物語はないだろう。

マンガの制作は、兄弟たちやその協力者たちとの緊密な連携のもとで進められた。一貫性のある物語の流れを構築するために、まず聖フランシスコの生涯の主要な段階を特定し、整理した。この準備段階のおかげで、作画作業に着手する前に必要となる脚本を練り上げることができた。しかし、スルタンのマリク・アル・カミルをどんなふ

うに描いたらよいだろうか。近づきがたい人物として描くべきだろうか、それとも非常に友好的な人物として描くべきだろうか。そして、長年にわたって修道会内で論争の的となってきた人物、兄弟エリアをどのように描くべきだろうか。

「私たちは、どの絵についても、さまざまな可能性を検討したうえで選択しなければなりませんでした。私たちは、『フランシスカン原典資料』から再出発しましたが、翻訳するというのは、裏切ることでもあります。それと同時に、具体化して、伝えるということでもあります。作者のÉmilieがフランシスコの回心の経験にできる限り近づくことができるようにと、助けとなる言葉を探すうちに、時にはまるで自分がチェラノのトマスになったような気持ちになりました」と、兄弟Frédéric-Marie Le Méhautéは説明した。

Émilie Droulersは、フランシスカンの歴史史料に細心の注意を払いながら、最初の鉛筆の下絵から最終的なペン画へと作業を進めていくなかで、マンガの表現法にふさわしい聖フランシスコの描き方をだんだんと見つけていった。フランスとベルギーの小さき兄弟会管区は、この出版プロジェクトを通して、必ずしも聖フランシスコの物語やフランシスカンの伝統に馴染みのない読者に、聖フランシスコを知ってもらう機会、あるいは再発見してもらう機会を提供したいと願っている。また、発行元のフランスの出版社は、他国での本作品の翻訳プロジェクトについても、前向きに検討する意向を示している。したがって、この呼びかけは、勇気をもった人たちに向けられている。聖フランシスコは、まだ最後の言葉を語っていないのである。

Émilie Rey、福者Duns Scotus 管区広報室

アシジのフランシスコ、神の反逆者
([*Francis of Assisi, God's rebel*](#))

Émilie Droulers作
出版社Éditions Emmanuel
2026年9月発行
200ページ、
15ユーロ



メジュゴリエにて、 フランシスカンジュビリーの締めくくりのミサ 総長の兄弟Massimo Fusarelli, OFM の主司式によるミサ



WWW.OFM.ORG

9月5日（土）、メジュゴリエにて、アシジの聖フランシスコの帰天（トランシトゥス）800周年を記念するフランシスカンジュビリーの締めくくりの祝賀行事が執行された。クロアチアおよびボスニア・ヘルツェゴビナのフランシスカン、フランシスカン修道女、在世会会員、フランシスコ青年会の若者たち、そして多数の巡礼者が参加した。

一日はメジュゴリエの主任司祭 兄弟Zvonimir

Pavičić による歓迎の言葉と、「主は私たちに兄弟フランシスコを与えてくださった」と題する 兄弟Ante Vučković の講話で幕を開けた。フランシスカン共同体理事会を代表し、フランシスカンボスナ・スレブレナ聖十字架修道会の省総長の兄弟Zdravko Dadićが、召命への新たな忠実さと福音の証しをもたらす機会としてジュビリーを生きるよう、フランシスカン家族に呼びかけた。



兄弟Zdravko Dadićは次のように語った。「このジュビリーが単なる思い出にとどまることなく、キリストに対する新たな情熱、召命への新たな忠実さ、修道誓願と福音を証しする勇気を私たちの内に呼び覚ますものでありますように。平和、連帯、希望が失われつつある世界において、フランシスカン家族は、すべての人々とすべての造物に対する平和、兄弟愛、簡素さ、そして愛の明らかなしるしであり続けます」

ミサは、小さき兄弟会（フランシスコ会）総長の兄弟Massimo Fusarelli, OFM によって行われ、184名の司祭が共同執利した。説教の中で総長は、聖フランシスコの歩みを読み解く鍵として「慈しみ」という主題を挙げ、慈しみを受け取り、慈しみを生き、慈しみを返すことについて思いを巡ら

せた。福音書に描かれる「見張り人」の像に触れ、兄弟Massimo は相互の責任について呼びかけた。「見張り人とは裁くために見張る者ではなく、兄弟が迷い出ないように見守る者のことである」。続いて聖フランシスコとハンセン病者との出会いや『遺言』の言葉を紐解き、慈しみとはフランシスコが他者に対して行うことだけでなく、神が彼の内に働かれることでもあると強調した。

さらに総長は、この地域におけるフランシスカンの数世紀にわたる臨在について言及した。「フランシスカンは人々の傍らに留まり続け、信仰の守護者、そして福音の宣教者であり続けてきた」家族や記憶、そして民族間の関係に戦争が残した傷跡を見つめつつ、彼は和解と平和こそがフランシスカン家族に託された具体的な課題であると指

摘した。「私たちは慈しみを受けた。私たちは慈しみを返そう。私たちは平和を受けた。さあ、平和をもたらそう」と兄弟Massimoは締めくくり、聖フランシスコの挨拶である「主があなたに平和を与られますように」を思い起こさせながら、修道共同体や家族、そしてこの地域の諸民族の間にその挨拶をもたらすよう一同に呼びかけた。

ミサの終了後、映画『主は私達に兄弟フランシスコを与えてくださった - アシジからクロアチアの地へ』が上映され、続いて兄弟Ante Vukojaの指揮によるフランシスカン聖歌隊のコンサートが行われた。一日の行事は聖体礼拝をもって幕を閉じた。

Animation of the Order



フランシスカン第一会の 養成総事務局会合 2026年9月12日、総本部において



WWW.OFM.ORG

2026年9月12日、小さき兄弟会の総本部において、小さき兄弟会、コンベンツアル聖フランシスコ会、カプチン聖フランシスコ会の養成総事務局会合が開かれた。

会合では、三会における養成分野での経験を分かち合うことができた。課題やチャンスが非常に似通っていることが明らか

になり、それぞれの会の事務局の活動に関する情報をより定期的に交換すれば、皆にとって有益となるという結論で一致した。

また、共通の関心となっているいくつかの問題、とくに共同研究センターの問題についても話し合われた。

会合の最後に、小さき兄弟会の総長の兄弟Massimo Fusarelliが加わり、フランシスカン家族内での協力の可能性について語った。

会合は、互いをより深く知って、今後の交流や意見交換のための基礎を築く機会となった。



また始めよう(Inicipe iterum)

小さき兄弟会のデジタル・メディア活動のためのガイドライン



WWW.OFM.ORG

福音は、あらゆる時代において、人々の言語や場において平和と善を分かち合うことを私たちに求める。今日、この使命は、広大で複雑なデジタル・メディアの世界にも拡大している。私たちは、小さき兄弟として、単にこの空間に参加するだけでなく、誠実さ、謙虚さ、意味ある関係によって、フランシスカンの生活をそこで実践するよう招かれている。そのため、デジタル・メディアにおいてこの使命を実践するための具体的な指針として、『また始めよう (Inicipe iterum) : 小さき兄弟会のデジタル・メディア活動のためのガイドライン』という文書が公開された。この文書は、教会の教えとフランシスカンの価値に基づき、すべての兄弟および志願者に対し、デジタル・メディアにおいてどのように活動すべきかについての指針を示している。



ダウンロードPDF: [Italiano](#) - [English](#) - [Espanol](#)



INCIPIE ITERUM

Guideline for Presence in Digital Media



OFM General Curia
Rome 2026

南アフリカ「平和の元后マリア」管区における JPIC委員会の会合 2026年9月1～2日



WWW.OFM.ORG

2026年9月1日、総本部JPIC事務局副局長の兄弟Taucen Hotlan Girsangは、JPIC 委員会書記の兄弟Albert Sibusiso, OFMとともに、南アフリカのベスターズで開催された「平和の女王聖母」修道会の JPIC 委員会会合に出席した。同会合はJPIC委員会のメインコーディネーターである 兄弟Mawetu, OFMが議長を務め、委員である 兄弟Makhomba, OFMも出席した。

この会合において 兄弟Sibusisoは、アシジの聖フランシスコの帰天（トランシトゥス）のジュビリーに向け、委員会がすでに計画しているいくつかの取り組みを発表した。これらには植樹、1週間にわたるシンポジウム、ならびにフランシスカンの修道者や在世会会員が参加する帰天の祝日に向けた回想（リコレクション）が含まれている。兄弟Taucen はJPIC アニ

メーターの主要な役割、すなわち養成、調整、協力、コミュニケーションの各分野における動機付け（アニメーション）について共有した。また、総本部JPIC事務局が南北アメリカ、地中海、アジア、アフリカの各地域においてフランシスカンネットワークの強化と発展にどのように取り組んでいるかについても説明した。

オープンディスカッションの場では、今後の行動に向けて以下の3つの主要な点が明確にされた。第一に、JPIC 委員会は既存の計画を具体化し、その活動を兄弟たちにより効果的に伝える必要があること。第二に、バイオガスを生成する手段として養豚プロジェクトを推進することを委員会が提案したこと。第三に、JPICの活動はフランシスカンの召命促進や、フランシスカンの生き方に関心を持つ若い

人々への関わり（アウトリーチ）の機会にもなり得ることである。午後に 兄弟Sibusiso と兄弟Taucen は、「被造物を大切にする世界祈願日」のために聖ジョセフ神学院（STJI）で執り行われたミサに参加した。この祝祭には、多くの修道女を含む様々な修道会の学生たちが多数参加した。

ミサの中で司式者は信仰と被造物への配慮との結びつきを強調し、真のキリスト教信仰は環境の正義と平和構築に向けた具体的な行動へと人々を導くものであると訴えた。この祝祭は、参加者にとって「私たちの共通の家」を守ることがキリストの弟子としての不可欠な要素であるという意識を深める機会となった。

翌9月2日、兄弟Taucenはダーバンのヒルトンにある養成の家



にて、養成期間中にある兄弟たちと面談する機会を得た。セッションの中で彼は「正義・平和・被造物の保全 (JPIC)」の価値観を紹介し、なぜこれらの価値観がフランシスカンにとって不可欠であり、修道会の「DNA」の一部と称されるのかを解説した。兄弟Taucenは、世界中のフランシスカンがどのようにJPICの使徒職に積極的に関わっているかについての事例を共有した。すなわち、平和のために祈り働くこと、ブラジルのアマゾン熱帯雨林を保護すること、南北アメリカや地中海で移民に寄り添い支援すること、ア

フリカの難民キャンプで人々にあずかること、そしてアジアにおいて健全な環境への権利を擁護することなどである。

対話の時間も設けられ、学生たちからは「どのようにして私たちがJPICに携わり、また他の人々にもJPICの活動への参加を促すことができるか」という重要な質問が提起された。これに対し 兄弟Taucenは、社会や環境の現実に対する意識と感受性こそがJPICへの参加の基本的な土台であると強調した。JPICは、不義や苦しみに直面したとき、いつでも応えようとする姿勢か

ら始まる。すなわち、社会的悪を目にしたときに立ち上がり、共通の家が搾取されているのを見たときに介抱し、戦争や紛争の被害者に出会ったときに連帯することである。したがって、フランシスカンにとってJPICは単なる追加の活動やプログラムではなく、アシジの聖フランシスコの精神に従って福音を生きる生き方そのものである。それはすべての兄弟に対し、自らの周りの現実を慈しみをもって見つめ、どのような行動が必要かを分別し、兄弟愛と連帯のうちに具体的に応えることを求めている。



News from the Entities

ブラジル・サザンコーン協議会、 養成者コース第2期が終了

ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン、チリからOFM養成者が参加



WWW.OFM.ORG



アパレシーダの聖母聖堂への巡礼をもって、養成者コースに参加していた小さき兄弟会（フランシスコ会）ブラジル・サザンコーン協議会の兄弟

たちは、2026年8月30日に2週間にわたる第2期対面養成を締めくくった。同協議会が主催したこの養成者・召命促進コーディネーター・守護者（ガー

ディアン) のためのコースには、ブラジルの9つの管区・分管区(6管区、3管区分管区) およびサザンコーンの3管区(アルゼンチン2、チリ1) が参加した。

養成プログラムはペトロポリス市(リオデジャネイロ州) にて、4月に2週間、8月に2週間の計2期にわたる対面研修に加え、5月から7月にかけて毎週オンラインセッションが実施された。コースにはアンパロのフランシスコ修道女会の修道女2名を含む、18名のフランシスカン修道者が参加した。ブラジル各地からの参加者に加え、パラグアイから2名、アルゼンチンからも1名の兄弟が参加した。

本コースでは養成プロセスの多様な側面が扱われた。特に精神性と修道生活に重点を置いた「養成者の役割」、技術・文書・養成構造を考慮した「養成者の使徒職」、「若者と現代の課題」、そして「養成と宣教の関係」である。講師陣はブラジル、アルゼンチン、チリからの登壇者で構成され、同協議会の現実を特徴付けるフランシスカン養成の課題に対し、文化を超えた視点を提供した。

参加者はまた、直接の体験を通じて、修道会の福音化のアイデンティティを形成する側面を学び、思索する機会を得た。貧困地区(ホシーニャ・ファヴェーラ) の共同体訪問、ホームレス状態にある人々を支援する社会プロジェクト(Casa Franciscana - SEFRAS Rio)、ファゼンダ・ダ・ダ・エスペランサ(希望の農場)、およびフレイ・ガルバオン聖堂(グアラチングタ) への訪問などである。

これらの体験の目的は、フランシスカンの養成が学術的な領域にとどまるものではなく、私たちの生活に問いを投げかける極限の状況との直接的な接触を通じた具体的体験こそが、フランシスカンのカリスマにおける正当な養成の道であることを参加者が理解できるよう支援することであった。

8月30日、参加者はアパレシーダの聖母聖堂へ巡礼を行い、聖母マリアの取次ぎのもと、養成プログラム中に体験したすべてのこと、そして各自の個人的・召命的歩みにおいて受けた恵みについて

神に感謝を捧げる恵みにあずかった。しかし、養成プログラムはこの対面フェーズで終了したわけではない。コースの締めくくりとして、参加者は養成プログラム中に最も深い関心を抱いたテーマについて論文を執筆することが求められている。講師陣による審査の後、これらの論文の一部はアンソロジーとしてまとめられ、電子書籍(e-book) として出版される予定である。

養成者の養成とは、単なる特定の役割への準備を超えた奉仕であり、フランシスカンの生き方の未来への投資である。養成の様々な段階において兄弟たちに最も身近に寄り添い、彼らが自らの召命を見極めるのを助け、人間的・霊的・兄弟的成長を促し、フランシスカンのカリスマが受け入れられ、生きられ、新しい世代へと受け継がれるようにするのは養成者たちである。「養成者を養成すること」は、フランシスカンの弟子職(ディサイプルスシップ) の養成において不可欠な課題である。

それは単に内容を伝達したり規則を教えたりすることではない。何よりも、アシジの聖フランシスコに靈感された生き方の形式に従い、イエス・キリストに従う歩みにおいて人々に寄り添うことを意味する。養成者の研修の質は、養成プロセス全体の質に直結し、ひいてはフランシスカンのカリスマそのものの活力に反映される。

ブラジル・サザンコーン協議会養成・学問事務局を代表し、このコースの各段階の完了を可能にくださったすべての方々に感謝を申し上げる。本コースを実現可能にしたフランシスカン・ミッション、講師陣、コンサルタント、参加者を受け入れた修道共同体、そして運営チームに深く感謝する。

分かち合われ、体験され、学ばれたすべてのことが、伴走と養成の奉仕において実を結び、フランシスカンの弟子職が忠実さと創造性、そして希望をもって生きられることを願う。

兄弟Sandro Roberto da Costa, OFM

トルコの大学生を対象とした OIKOS Mediterraneoのサマーキャンプ 2026年9月2～6日、ビューユカダ



WWW.OFM.ORG



「共通の善への配慮：脆弱性から企画・立案へ」と題されたサマーキャンプがイスタンブールで閉幕した。この教育的かつワークショップ形式の試みは、プリンス諸島の一つであるビューユカダの素晴らしい環境において、9月2日から6日まで開催された。

OIKOS Mediterraneo が主催し、兄弟Luca Refatti, OP (トルコ大学司牧局長) の招きに応じて実現したこの取り組みには、トルコで学びつつも16か国(トルコ、レバノン、エクアドル、赤道ギニア、コンゴ民主共和国、カメルーン、ギニアビサウ、チャド、ガボン、トーゴ、ベナン、イラン、ギニア、コートジボワール、ルワンダ、ナイジェリア)もの異なる国々の出身である若い大学生たちが集まった。参加者たちは「み心のフランシスカン宣教修道女会」の修道院に滞在し、「小さき兄弟会」のサン・パチフィコ館にて迎え入れられた。

最初の数日間は、研修およびエコロジカルかつ社会的な考察に重点が置かれた。開会にあたり、兄弟Antonino Clemenza, OFM が「太陽の歌(被造物の歌)を通じた宇宙的兄弟愛への歩み」というテーマで発表とワークショップを行った。続いて兄弟Francesco Zecca, OFM と Paolo Cancelli 教授が、現代の脆弱性と向き合い、それを回復への

機会へと変化させる方法についてのワークショップを主導した。彼らは OIKOS Mediterraneo が進める行動計画を紹介し、地中海海域を根本的な象徴的・パラダイムの空間として提示した。

サマーキャンプの実践的な中心となったのは、集中型ワークショップであるハッカソンであった。作業グループに分かれた若者たちは、トルコにおける総合的エコロジーのための Oikos 拠点を豊かにすることを目的とした、6つの具体的なプロジェクトを考案した。提出された提案は、社会のおよび共同体的に強い影響力を持つものである。

1. Kardesol (私たちは兄弟)： ホームレスの人々のための統合的支援プログラム。食料援助と心理的ケア、住宅確保の支援を組み合わせたものの。

2. Birlikte (共に)： 留学生の孤独感と闘うために設計されたモバイルアプリ。社会的ネットワークの構築、中古品の交換、地域イベントの共有を促進する。

3. Talent 兄弟idge： 大学生の才能とビジネスの世界を結びつけるために作成されたデジタルプラットフォーム。若者のスキルと企業とのマッチングを円滑にする。

4. **Seed (種)** : 傾聴と兄弟愛の精神に基づき、愛する者を失った人々や深刻な苦難の時期にある人々に感情的支援と連帯を提供するプロジェクト。

5. **Oikos Karabük** : 住居を失った大学生を支援し受け入れることを目的とした、学生の住居危機への実践的な対応策。

6. **Mosaic** : 創造性を通じた異文化間の対話、分かち合い、出会いの場として設計された、芸術と音楽の異文化フェスティバル。

参加者たちの絶大な取り組みのおかげで、イスタンブール・サマーキャンプは、希望のワークショップであり、地球市民権と国境を越えた兄弟愛の具体的なモデルであることを改めて証明した。

ルブンバシにおけるフランシスカンの喜び 聖母誕生の祝日における修道誓願およびジュビリー



WWW.OFM.ORG



2026年9月8日、聖母マリアの誕生を祝う喜ばしい祝日、コンゴ民主共和国ルブンバシのキゴマ地区の中心に位置する「使徒たちの元后マリア」小教区は、深いフランシスカンの喜びに満たされた。

簡素さと恵みに満ちたこの日、11名の「アフリカの聖ベネディクト」管区所属の兄弟と、5名の「パドヴァの聖アントニオ」管区所属の兄弟からなる計16名の兄弟が初誓願を立てた。また、6名の兄弟（アフリカの聖ベネディクト管区から4名、パドヴァの聖アントニオ管区から2名）が荘厳誓願を宣立した。さ

らに他の5名の兄弟が修道生活25周年を祝った。「アフリカの聖ベネディクト」管区の管区長の兄弟 Georges Misange が執り行ったミサは、同氏にとっても自らの奉献25周年を感謝する機会となった。

小教区共同体、初誓願者およびジュビリーを迎えた兄弟たちの家族、フランシスカン家族の会員、そして多数の友人たちが、祈りと愛情をもって兄弟たちを取り囲んだ。簡素で喜びに満ち、深く福音的な兄弟愛の雰囲気が集会全体を包み込んだ。

説教の中で管区長は、この祝祭が聖母マリアの誕生、新たな

修道的奉献、そして四半世紀にわたる奉献生活の忠実さという3つの恵みを一つにするものであると振り返った。アシジの聖フランシスコの帰天（トランシトゥス）800周年を迎えた今年、彼は「アシジの貧者」の遺産が生きた福音であり続けていると強調した。キリストの系図において神が完璧な者ではなく、身分の低い者や謙遜な者（マリア、フランシスコ、そして質素な背景を持つ多くの兄弟たち）を選ばれたのと同様である。フランシスカンの生き方は、名誉や肩書、権力を求めた瞬間にその魂を失うのだと彼は強く主張した。

初誓願を宣立した兄弟たちに向け、彼は清貧、服従、兄弟愛が真の離脱（執着を捨てること）を求めるものであると念を押した。修道服は特権でも社会保障でもなく、たとえ犠牲を払うことになろうとも愛し続けるという誓いである。荘厳誓願を宣立した兄弟たちに対しては、彼らの決定的な「イエス」という返答が、あらゆるものが使い捨てられ取り替えられる現代世界における預言的行為であるこ

とを示した。そして、最初の愛が習慣（ルーティン）によって窒息させられることのないよう強く求めた。ジュビリーを迎えた人々には、25周年は勲章ではなく、「私たちは共同体に対して何を中心に差し出してきたか」という問いであると喚起した。長老であることが回心にとって代わることは決してない。最後に省総長は、神、教会、そして兄弟たちに対して開かれた存在であり続けるといふ、フランシスカンの忠実さの核心を思い起こさせた。修道誓願を全うして生きるためには、自己誇示への欲望、所有への意志、対立、そして貧しい人々に対する無関心を自らの内に死なせなければならない。世界が求めているのは、世俗的あるいは忙しい修道者ではなく、祈りに満たされ、根本的な兄弟愛に根ざし、喜ばしい清貧を体

現する兄弟たちである。自らの生活の透明性と聖性の力によって、世界に揺さぶりをかけることのできる人々である。この恵みあふれた日に、共同体はそれぞれの歩みを主の謙遜なはしめであるマリアと、普遍的な兄弟である聖フランシスコに委ねた。彼らの奉仕への準備と謙遜さが新誓願者に靈感を与え、終生誓願を立てた人々を支え、ジュビリーを迎えた人々の忠実さを再び燃え立たせることが祈られた。この祝祭がフランシスカン家族全体にとって、神とその民に仕える簡素で熱心な「小さき兄弟」として、福音の喜びのうちに歩む呼びかけとなることが望まれる。

兄弟Luca Nzita, OFM による寄稿

LIFE in the Order



荘厳誓願

- ・9月13日、聖十字架管区（スロヴェニア）
兄弟Bernardin (Domen) Ilijaš
- ・9月12日、アシジの聖フランシスコ・セラフィム管区
兄弟Angelo Nicolò Calleda
兄弟Gabriele Calzoni
兄弟Dario Colella
- ・9月12日、アシジの聖フランシスコ管区（ベトナム）
兄弟Anthony (Phi Thien) Ho
- ・9月8日、聖キュリロスと聖メトディオス管区
兄弟Danko Mihovilović
兄弟Loris (Petar Loris) Pilav
- ・8月23日、王であるキリスト分管区（スイス）
兄弟Niklaus (Silvio) Meienberg

- ・8月3日、聖ペトロと聖パウロ管区（メキシコ）

兄弟Jesús Gerardo León Romo

兄弟Filiberto Maciel García

兄弟Juan Alonso Ramírez Hernández



帰天された兄弟たち

- +9月5日：兄弟Adam (Eugene) Szufel、
グアダループの聖母管区（アメリカ合衆国）
- + 8月31日：兄弟Werenfried (Bernhard)
Wessel、聖エリザベト管区（ドイツ）
- +8月17日：兄弟Zlatko (Marijan) Matanović、
聖十字架管区（ボスニア・ヘルツェゴビナ）

Information received from the General Secretariat

OIKOS MEDITERRANEOがエジプトで 多文化対話・諸宗教対話を推進 「多様性のポリフォニーとしての地中海」



WWW.OFM.ORG



9月7日から12日まで、イタリアとエジプトの若者たちのグループが、文化外交や音楽ワークショップ、アル・アズハル大学との重要な協力関係の強化といった没入型の経験をともにした。

実際、「多様性のポリフォニーとしての地中海」と題されたこのキャンプは、OIKOS MEDITERRANEOが推進する文化外交と交流の経験であった。この取り組みは、エジプトの小さき兄弟会管区の協力のもと、カイロのフランシスカン文化センター所長の兄弟Milad Shehataが企画した。

初日は、出会いの日となり、それから現地の文化、法律、宗教に関する考察を行なったMarianne Mounirの指導のもと、エジプトにおける多様性というテーマについて深めた。若者たちの、有名な「ゴミの街」マンシェイエト・ナーセルと、岩を丸ごとくり抜いて建てられた聖シモンの巡礼所の訪問は、視覚的にも、精神的にも、きわめて印象深い時間となった。その後、プログラムは、地中海をテーマにしたワークショップと、兄弟Francesco ZeccaによるOIKOS MEDITERRANEOの正式な紹介へと続き、料理コンテストと音楽ワークショップで終わった。

今回の旅全体でもっとも意義深いイベントの一つは、50万人の学生が学ぶ名門アル・アズハル大学との連携強化を目的とした公式会合であった。全面的に諸宗教対話と交流にささげられたこの日、イタリアとエジプトの代表団は、世界アズハル卒業生機構の代表たちから大変温かい歓迎を受けた。

セミナーには、学界や宗教界から著名人が参加した。同機構の事務局長で、アル・アズハル大イマームの顧問も務めるAbdel Dayem Nossair教授、同機構の学術顧問であり、アル・アズハル大学元学長のIbrahim Al-Hadid教授、フランシスカン文化センター所長の兄弟Milad Shehata、同機構のプロジェクト部門長であるMohamed Galal Kotb技師、同副部門長のTasneem Ammar教授とTasneem Yehia教授、プロジェクト部門所属のMostafa Abdel Hamid教授などである。

アル・アズハル大学の文化交流担当者もあいさつに訪れた。地中海地域の多様性をテーマとした討論の後、参加者たちは、アラビア書道のワークショップや、兄弟Francesco Zeccaが指導する多文化交流活動に参加した。この日の会合は、感謝状の贈呈を

もって幕を閉じたが、多様性を未来構築の具体的な空間に変えるという意味で、OIKOS MEDITERRANEOと教皇庁立アントニアヌム大学、アル・アズハル大学にとって、歴史的な一歩となった。

3日目は、マエストロCarlo Morelli（ナポリ出身のオーケストラ指揮者、作曲家、編曲家）が特別に参加した。マエストロは、イタリアからグループに合流し、リズムと、音楽のもつ文化的障壁を取り除く力に焦点を当てた音楽ワークショップを指導した。この音楽の旅は、カイロの小児がん病院で、最大の連帯の表現を見いだした。そこで若者たちは、小さな患者たちと出会い、音楽療法ワークショップを実施した。この日はその後、エジプト国立文明博物館訪問で終わった。

最後に、この旅は、3つの大きなアブラハムの伝統の礼拝の場所の発見に焦点を当てた。若者たちは、エジプトの深い宗教的な多元性をあかしするモニュメントを訪れた。そのなかには、スルタン・ハッサン・モスク（1356年）、アル・リファイ・モスク（1912年）、コプト正教会の聖マリア教会、ギ

リシャ正教の聖ゲオルギオス教会、そして歴史あるベン・エズラ・シナゴグが含まれていた。それは、地中海世界の多元的なルーツと文化的な豊かさをあらためて確認させてくれる、象徴的な行程であった。

このような文脈において、アシジの聖フランシスコの人物像と現代のアラブ文化との関係に焦点を当てた講演が行なわれた。この旅に同伴したのは、ボローニャ大学およびカイロのイタリア考古学センターに所属するGiuseppe Cecere教授で、同教授は、エジプトの偉大な学者で翻訳家のHasan 'Uthmān（1907~1973年）の視点を紹介した。

この経験は、ギザのピラミッドとスフィンクスの見学で幕を閉じた。これらは、地中海の複雑さと豊かさをいまなお語り続ける、数千年にわたる歴史の象徴である。

※ OIKOS MEDITERRANEOは2020年にイタリアのタラントのフランシスカンで作られた「地中海のインテグラル・エコロジー・センター」のこと。

カトリックのデジタル宣教師たちによる アジア初の総会

デジタル世界における教会の宣教の共同の取り組み



WWW.OFM.ORG



ASIAN CATHOLIC DIGITAL MISSIONARY ASSEMBLY 2026



フィリピン、ケソン市。フランシスカン・コミュニケーション・

フィリピン (Franciscan Communication Philippines) とフランシスカン会家族の他のメンバーたちは、2026年9月10日から13日まで、アジア全土から集まった100名を超えるカトリックのデジタル宣教師、コミュニケーター、コンテンツクリエイター、信仰のインフルエンサーたちとともに、ケソン市のラジオ・ヴェリタス・アジア (Radio Veritas Asia) で開催された第一回カトリック・デジタル宣教師アジア総会に参加した。

フランシスカン家族を代表して、小さき兄弟会とフランシスカン・コミュニケーション・フィリピン、聖エリザベトのフランシスコ修道女会、無原罪の聖母のフランシスコ修道会が参加し、デジタル世界における教会の宣教の共同の取り組みをあかした。この総会は、「インフルエンサーから証人へ：アジアにおけるデジタル宣教のためのシノドス的な歩み」というテーマのもと、アジア司教協議会連盟の広報局とラジオ・ヴェリタス・アジアが主催した。バチカン広報省も、フリー・プレゼント・ネットワーク (Fully Present Network) を通して協力している。バチカン広報省の神学・司牧局長のNataša Govekarが、この会合を司会した。

教皇レオ14世は、参加者たちに対して、「デジタルコンテンツを通して、イエス・キリストの真の証人となる」ことを勧めた。開会ミサでは、リパのGilbert Garcera大司教が、「私たちは、アジアに向かって声を上げるのではなく、アジアに寄り添うことで、イエスを伝えるのです」と述べた。

アジア司教協議会広報局長のMarcelino Antonio “Junie” Maralit Jr. 司教は、デジタル宣教のための5つのステップを提案した。それは、「コンテンツから出会いへ」、「視聴者から共同体へ」、「拡散から忠実さへ」、「競争から協力へ」、そして「影響力からあかしへ」というものである。

アシジの聖フランシスコとアシジの聖クララは、この総会の6人の守護聖人うちの2人であり、そのこ

とが、フランシスカン家族とこの歴史的な会合とを結びつける特別な絆となった。

また、総会では、よりシノドス的で関係的なオンライン上の教会活動を築いていくための、修道女たち、信徒の女性たち、若者たち、そしてデジタル宣教師たちの貢献が紹介された。

カルーカン司教のPablo Virgilio David枢機卿は、閉会ミサのなかで、参加者たちに、「他者が扉を閉ざすとき、あなたたちは架け橋となりなさい」という挑戦を投げかけた。

総会は、参加したフランシスカン員たちにとって、兄弟性、小さき者であること、対話、平和、そして貧しい人たちへの寄り添いという価値が、デジタル大陸においても実践されなければならないことを、あらためて確認する機会となった。フランシスカンのコミュニケーターたちには、アシジの聖フランシスコと聖クララに導かれて、デジタル空間において、架け橋を築き、兄弟性を推進し、平和を宣べ伝え、喜びのうちに福音をあかしすることが呼びかけられている。

Franciscan Bookmark



Studi Francescani.
Anno 123, 2026, n.1-2

**Le tre famiglie del Primo ordine francescano:
evoluzione e identità tra il XVI e il XX secolo.**



A cura di Fr. Felice Autieri, OFMConv



兄弟Gerardo Antonio Vargas Cruz (OFM)、 プエルトリコのファハルド・ウマカオ教区の 補佐司教に任命

2026年9月8日



WWW.OFM.ORG



教皇は、これまでプエルトリコのサン・ファン大司教区で聖職者担当司教代理を務めていた兄弟Gerardo Antonio Vargas Cruz神父 (OFM) を、ファハルド・ウマカオ教区 (プエルトリコ) の補佐司教に任命した。

略歴

Gerardo Antonio Vargas Cruz 司教 (OFM) は、1976年12月2日に、マヤグエスで生まれた。カリブ海地域のフランシスカン分管区で小さき兄弟会に入会し、修練期はドミニカ共和国で過ごした。その後、プエルトリコのバヤモン中央大学で学び、社会福祉学の学士号および神学修士号を取得した。

2004年に荘厳誓願を宣立し、2006年8月12日に司祭叙階された。

これまでに、以下の職務を歴任した。修練長、プエルトリコの在世フランシスカン全国霊的補佐、カリブ海地域のフランシスカンの副分管区長および分管区長、バヤモン中央大学教授、ラジオ番組のディレクター、バヤモン刑務所のチャプレン、プエルトリコのサン・ファン大司教区の聖職者担当司教代理、プエルトリコ修道者協議会の協力者。

From [the bulletin of the Holy See Press Office of 8 September 2026.](#)

2026年9月8日の『バチカン広報室広報』より

Subscribe

Write us

Web

Follow us



Newsletter



comgen@ofm.org



www.ofm.org



@ofmorg



@fratrumminorum



@ofm.org



flickr

Curia Generale dei Frati Minori
Via di S. Maria Mediatrix, 25
Roma, Italia

Director: Br. Byron A. Chamann Anléu OFM
Translators: Br. John Luke, Br. Arthur Andersen OFM

OFM
Ordo Fratrum Minorum
© 2026 All rights reserved